

長安の月 寧樂の月

仲麻呂帰らず



松田鐵也

長安の月
寧樂の月

仲麻呂帰らず

松田鐵也

著者紹介

松田 鐵也 (まつだ てつや)

大正8年生まれ。東京大学法学部政治学科卒。

昭和19年国鉄本社入社。旭川鉄道管理局長、国鉄本社広報部長、同資材局長、セメントターミナル株式会社副社長を経て、現在、著述に専念。

著書『北見のおばば』(時事通信社)、『100人の子供と一人の母』(日本鉄道厚生事業協会)

長安の月 寧楽の月——仲麻呂帰らず 定価 2500円

昭和60年12月15日 発行

昭和63年3月1日 二刷

著 者 松 田 鐵 也

発行者 蓮 見 博 昭

発行所 株式会社 時事通信社

東京都千代田区日比谷公園1-3 〒100

電話 東京03(591)1111(大代表) 振替 東京 4-85000

印刷所 株式会社 太平印刷社

東京都品川区東品川1-6-16

製 本 所 大口製本印刷株式会社

©1985 TETUYA MATUDA (落丁・乱丁はおとりかえいたします)

ISBN 4-7887-8536-6

目次

寧都春宵 ^{ねいとしゆんしやう}	月下送別	父の希望 ^{のぞみ}	母の願望 ^{ねがい}	鹿島立ち ^{かしまだち}	四つの船 ^{よふね}	遣唐使	使節の横顔 ^{プロフィール}	留学生群像
1	11	29	51	65	72	86	100	107
風浪	南船北馬	長安の青春(一)	長安の青春(二)	元宵觀燈	科舉	学而時習之	仲麻呂開眼	長安殘俠
122	140	163	179	194	211	224	235	245

高力士	388	安祿山	524
二友帰国	373	蘇州明月	513
祇教 けんきょう	362	離愁	497
藤の花ざかり	348	旧友再会	481
多胡碑	343	真備再渡	475
不比等の藤棚作り	326	大仏開眼	459
百二十二妃妾	315	天皇彷徨	453
玄宗	305	宮子様	443
華燭	293	広嗣謀叛	439
探花更に花を獲 え たり	282	裳瘡 もがさ	429
探花及第	267	李白	406
貢院	258	楊貴妃	397

白雲愁色

533

貴妃散華

540

砧きぬた

545

親友苦惱

561

鑑 真

570

いま一人の仲麻呂

575

女帝と道鏡

589

真備晩年

595

中将姫

600

あとがき

長安寧日

604

喜 娘

609

紫藤花下漸黃昏

624

井戸掘人仲麻呂

631

遣唐使以後の日中關係

641

四十七代目の宰相

647

重陽插花

662

長安の月

673

寧樂ならの月

682

寧都春宵ねいとしゆんしょう

都は春の夕暮れである。都と言っても京都ではない。志賀でも飛鳥でもない。寧樂の都である。時代も一二六八年の遠い昔、正確に言えば人皇第四十四代の元正天皇が即位して三年目の靈龜三年（七一七）三月十五日の夕つ方である。去年は十一月が閏だったため、今年は春が早く訪れ弥生の気候も卯月並み、実際の季節としては春も酺を過ぎかかった時季である。寧樂の都では桜は疾うに散つてしまい、晩春の暖かい風に誘われて森や街路のわきの木々は萌黄色の嫩葉を一斉に噴き出し、八重桜は濃艶な花卉を微風に揺るがせ、藤は紫や白の花房を長く垂らし始めている。しばらく前、海に向こうの唐土から渡つて来たという牡丹も此の都の土によく根付いて、今年もあちこちの人家の庭で紅味を帯びた蕾を見せ始めた。

寧樂。当時の日本国の首都であるこの都城は奈良とも書き、奈羅、那羅、乃樂、諾樂とも表現した。いずれも漢字を使って出来るだけ典雅優美な感じを出そうとしたものであろう。これらの中で書くにもやさしく長い間民衆に最も親しまれ用いられた「奈良」という名称をこれからはこの古い都の表記法として使わせて貰うことにしたいが、いかにも古都らしい高雅な感じのする表現は寧樂だと思うので物語の冒頭にだけはこの文字を使わせて貰うことにした。この都の正式な呼称は平城京である。平城京は西暦四〇〇年代中国の北方で栄えた北魏という国の都の名「平城」から借りたという説もある。後年京都に国都が遷つてから平城京は北の平安京（北都・北京）に対し南都あるいは南京とも呼ばれたが、その頃は離宮は別として日本随一の、そして日本最大最新の大都であった。

奈良から約二十キロメートル南、飛鳥地方の北部に在った藤原京から王都をこの地に移してから、すでに七年の歳月を閲してゐる。唐の都長安を模して造ったと言われるこの新都は、今も新都らしい瑞々しさと華麗さを失つてはいないが、七年という時の流れが刻みつけた落ちつきと寂びが漸く都全体に滲み渡つて来て、見方によればそれだけ都の重みと貫禄を加えて来たとも言えよう。

平城京造営のモデルとした唐都長安の都の規模は又一格上だ。長安の都の大きさは南北八・二キロ、東西九・七キロでそれまでの中国歴代の王都の中でも最大の広さを持つが、奈良の都は南北四・七キロ、東西四・二キロの広さで長安に比べれば約四分の一の面積に過ぎない。これ以上を望むのは奈良盆地の地形からも無理だしこの都に住む人口の想定や官人数などから考えてもこれだけの広さがあれば当分は間に合ふと考えたのだ。長安の規模には及びもないが、今までの日本の都城の中では勿論最大で、前都藤原京に比べても約五倍の広さになっている。この大きさがあれば国民に対しても外国から来た使臣に見せても国都としての威信は十分に示される。

都の構造は中央北端の一郭に約方一キロの宮城があり、宮城の南端の朱雀門から真南に向かって一本の大路が延びている。帝都のメインストリート朱雀大路だ。幅員は八十五メートル、長安の宮城前の大街路で同じ名前を持つ朱雀大街の道路幅百五十メートルに比べれば約半分だが、日本の都としては画期的な幅員だ。朱雀大路を境にして東側が左京、西側が右京と呼ばれる。朱雀大路に平行して左京右京の中をそれぞれ三本の道（幅員二十四メートル）の道が走り東西にも同じ幅員の道が通じ、都城を基盤の目のように分けている。この道路交差によつて出来た正方形の土地が、左京右京各三十四区画、これが坊だ。一坊の広さは四町四方、つまり三百六十尺平方（四百三十五メートル平方）で相当な広さである。この坊が平城京には六十八もあるのだ。坊は防の義で防壁に囲まれた居住区の意だが、長安の坊の四周の壁はかなり高いに

比し平城京では殆ど平坦である。奈良の朝廷は都の狭さを補って出来る限り都城を拡張しようと考え、一部地域で方形の街区の外に更に街区を張り出させて道路を通じ坊を造った。即ち左京東北部に張り出させた外京区と右京北辺に造った北辺坊である。外京には十二の坊、北辺地区には標準の半分の広さの坊が三つ出来た。坊の総計は八十三となった。坊には更に幅十二メートルの小路が縦横に三本ずつ敷かれ、十六の坪に分けられる。坪は町とも言われ一坪は四百尺（百二十一メートル）平方で宅地にすると三十二戸分位建てられた。一戸当たり今の坪に直すと約一四〇坪位だからかなりの広さだ。

和銅元年二月十五日の先帝元明女帝の遷都の詔に言う如く、新都は大和盆地の北端奈良山のすぐ南に地を卜した。青龍、白虎、朱雀、玄武の四神が図に叶って正しく位置し、香久、耳成、畝傍の三山を南方の鎮めとしたこの都は大和の国のまほろばの美しき郷である。遷都以来早くも七年になるが、今や左京右京の各坊に貴族・官人や庶民の家宅が次々と立て込み、年毎に戸口も増加して今では宮城に近い北部の諸坊は勿論、自然に恵まれた閑静な外京地区、南部も東西両市の周辺などは人家が密集し、その他でも神社や寺院の門前などには店屋も姿を見せ始めている。この頃都の総人口は十万を越え、官人だけでも一万近いという。

人家の外にこの町には一国の都であることを象徴する建物群が二つある。その一つは言うまでもなくこの国の政を統べ聞き召される天皇の御住居つまり宮城と天皇が政を執られる上で催される諸儀式を行い、官人や外国使節を接見するための宮殿群であり、もう一つは二官八省の官人が政治の実務を行う官庁役所群である。長安では帝王の私生活の場所を宮城と呼び官吏の執務場所つまり官庁群を皇城と称し両域を截然と区別していたが、平城京ではきびしい区分けをせずほぼ一団一体となっている。

藤原京から平城京への遷都は文武天皇の慶雲四年（七〇七）頃から検討されていたが、その年天皇は崩

じ、後に遺された首皇子（後の聖武天皇）はまだ七歳という幼少なので祖母（阿閉皇女）が即位した。元明天皇である。元明天皇は翌年武蔵国秩父から和銅が発見され献上されたのを機に年号を和銅と改め、都を奈良盆地の北端に遷すことを決定、新都造営の勅を下してその年の秋九月には自ら新都の予定地を視察された。直ちに造平城京司が発令され（長官は中納言阿倍宿奈麻呂・民部卿多治比池守の二人）十二月には地鎮祭が行われた。

翌和銅二年（七〇九）には造営工事が本格的に始まり、和銅三年三月には都は平城京へ移っているから、工事は一年半足らずで概ね竣工してしまつたのである。しかし宮城の建物で最も大きく重要な大極殿や朝堂院、朱雀大路南端の羅城門などは急には出来なかつた。遷都の理由としては、文武朝後半期に全国に流行した疫病や飢饉のお被いのためとか、古い時代の氏族縁故関係の強く深い飛鳥から逃げ出したかったのだとか、官私仏教寺院群との腐れ縁を断ちたかったのだとか、難波の港や東国への交通の便を考えたとか、いろいろな揣摩臆測があり、皆少しは当たっているのだろうが、それらのいずれにも増して大きかつた理由は遣唐使の帰朝報告であつたろう。天智天皇以後三十余年途絶えていた遣唐使派遣がやっと復活したのが文武天皇の大宝二年であり、使節一行は一部未帰還者があつたものの二年後大使以下随員は大部分無事に帰国して最近における唐国の諸情況を報告した。特に彼らは殷賑繁榮を極めている洛陽や長安の都のことを事細かに奏上説明したに違いない。文武帝の気持は新都造営へ向かつて大きく動いたのではない。遣唐執節使の粟田真人は間もなく参議に昇任して参議に参画するようになったから、その席でも機会あるごとに自分の眼で見て来た隣邦大帝国の壮嚴な帝城の姿を引き合いに出して、王都こそ国威の象徴であることを力説したであらう。飛鳥の宮居は一代毎に他処に移り代わる方式だったが、それでも十代の天皇が百十八年間も都していた土地柄であり、いざ飛鳥以外の土地へ遷都となると大宮人達も心残るものが

多かつたらうが、国家千年の計を考えて元明女帝は奈良遷都に踏み切ったのである。

ともかく遷都は実行された。新しい都の骨格は一年半で作られてしまった。遷都五年目には大極殿も完成し、朱雀門も竣工した。少し遅れたが百官が執務をする朝堂院も竣工し、都城南端の羅城門も南北五段の石段の上に堂々と立ち上がり北の朱雀門に対した。その他の建物も日を逐うて藤原京から移築されたり新設されたりして次第に整備されて行つたが、奈良の都には後々まで二種類の建物が混じっていた。一つは在来の日本式であり、今一つは舶来の大陸様式である。日本式の特徴は掘立、高床、板壁、檜皮葺・草葺の屋根。大陸式の特徴は礎石を据え、その上に朱塗りの柱を建て、磚（土を焼いて作つた方形の煉瓦）を敷いた床、白亜の壁、緑釉で仕上げた屋根瓦。所が一群の建物が同一方式に作られるのではなく、例えば宮城内でも大陸風の建物は朝堂院外の官衙で、奥の内裏関係の建物は上古さながらの掘立柱、白木作り、檜皮葺きの和風作りなのである。二つの様式が混在したのは、一つには財政や建築技術の関係もあつたらうが、一方では文化文明の尺度の一つである建築物の面での対外的配慮を行いながら、一方では在来慣れ親しんで来た日本様式日本趣味への愛着が捨てきれなかつたということではあるまいか。新しい大陸様式の採用は、始め政務や対外的儀式に用いられる建物に限られていたが、澎湃として逐年強く高く押して来る大陸文化の波に抗し切れず、又都人の大陸様式建物への憧憬も年毎に強まって、奈良遷都十五年後の神龜元年（七二四）には、太政官から五位以上の官人や庶民でも造れる能力のある者は出来るだけ掘立・板屋・草葺きの家を廢めて瓦葺きで白塗り赤塗りの壁を持った家に造り替えるようにと指示をしている。奈良の都は年と共に官民の建物にまで大陸の形と色合いが染みこんで来たのである。

日本の第一次仏教興隆期である七世紀始め聖德太子によって斑鳩の里に創建された法隆寺を手始めに、約百年に亙る飛鳥王朝の時代に各天皇の皇居周辺には数多くの官寺や氏寺が建てられた。奈良遷都の際そ

これらの寺々はどうしたのだろうか。お寺など面倒臭い、置いてゆけと思つても仏教興隆の時代、簡単に縁を切るわけには行かない。やはり寺院も当時の王都の重要な構成要素の一つであつて見れば、遷都と共にこれも連れて行かなければならない。藤原京時代飛鳥に建てられていた四官寺のうち大安寺（大官大寺・百濟寺）は遷都六年後、葉師寺と元興寺（飛鳥寺Ⅱ法興寺）はその二年後に都入りした。何故か弘福寺（川原寺）だけは移らなかつた。貴族諸氏の氏寺も陸統と左京や外京の然るべき地域に寺域を定め次々と移築されて行つた。葛木寺・紀寺・下毛野寺・穂積寺などである。この他に遷都（和銅三年）と共に早々都に移転したのが藤原氏の氏寺興福寺である。興福寺は飛鳥では厩坂寺という寺名だったが、もともとは藤原鎌足の遺言で鎌足夫人の鏡王女が夫の菩提を弔うため山城国山科に建立した山階寺が起源、それを鎌足の子の不比等が飛鳥に移したもので、従つて今回は二度目の移転である。不比等は官寺の移転などに氣を配らず、都つまり宮殿や大内裏官衙の移転と殆ど同時に我が氏寺を都入りさせてしまつた。場所は外京三条七坊奈良山塊の麓である。時に不比等の身分は右大臣。娘（長女）宮子を文武帝の夫人に入れたが、三年前帝崩御の悲運に遭つた。しかし宮子の腹からは程なく皇子が生まれ、すでに立太子の式を行つて何時の日か即位することを約束されている。天皇の外祖父たることは目前に約束されている。朝廷では一応上席の左大臣はいるが、事務能力がすぐれている上に今の政治の基幹である大宝律令は彼が中心となつて編纂したものである。己も自分の力を知り、人もその力を認め畏れている。不比等は判断した。早くお寺も都へ移してしまつた方がいい。これも勢力拡張の一つだ。すでに財力も十分蓄えていたから移転費には事欠かないが半公半私のようなやり方で移転費を出してしまつた。移転後東金堂・南円堂・三重塔・五重塔などを次々と建設し南門の前にインドの獼猴池を模して猿沢池を配した。境内は広く、伽藍や堂塔は巨大壮麗、檀家が藤原氏と来ては都人の注目を惹き参詣者を集めない筈がない。短時日のうちに奈良の都の名所とな

り、名声は高まるばかり、自然に奈良四大寺の一つに数えられ、更に七佛寺の一つとなり比叡山延暦寺北嶺の向こうを張つて南都と称される程盛威を振るい僧兵を養うに至る。一説によると奈良遷都は藤原氏の棟梁不比等が皇太子を外孫に持ち天皇の外祖父になるのを目睫に控えてここで決定的な体制固めをしておこうと考え、その為には旧来の諸豪族諸名家と縁の深い飛鳥と縁を切つて新都に移ることが自族の勢力を強め旧勢力の力を削ぐ最も有力な方法と考えたのが動機だったとも言ふ。彼は遷都に曰くありげな尤もらしい理屈をつけて娘婿の文武帝を説得し次の元明帝に早期実行を焚きつけたのだ。彼が平城京にかけた期待の大きさがよくわかる。それを大唐の見聞で裏付けて空気を作りをやったのが大宝度遣唐使粟田真人だ。何を企んでも殆ど失敗をしでかしたことのない不比等だったが今回も又成功したようだ。遷都は成功した。農民を中心とする何干という労務者を使役し、突貫工事を進めた結果予想以上の短日月で骨格が出来た。官人や庶民は藤原京と別れる悲しみを歌にして万葉集に残している。労働者は役務の辛さに堪えられず毎日のように工事現場から逃亡する。捕まると笞の刑が待っている。一日三十笞叩かれて又現場に戻る。捕まらなくても遠い家へ帰るのはなかなか難しい。途中で餓死する者も出る。帰れば国司や郡司に捕まる。帝王（朝廷）が新都を造る夢と希望の蔭には必ずその仕事に使われる民の苦しみと悲しみがある。しかし新都造営を企画し工事を進めている者は庶民の苦しみや悲しみなどを気にしてはおられない。不比等はある。わしはわしの考え決めたことをやればよい。わしの決めたことやつたことで失敗したことはない。わしはそれによつて藤原氏を守り榮えさせればよい。それは皇室とこの国を守り榮えさせることだ。わしは天皇家とも一体だし国そのものでもあるのだ。庶民は苦しんで国の為に尽くせばよい。今のお上など皇太子が成人するまでの「仲継ぎ役」だ。

今不比等右大臣から仲継ぎ役と評された元正天皇はどんな方か。前帝元明は元正の母、前々帝文武は元

正の弟で帝位は子から母へ、母から又子（娘）へと移つたのである。現在の皇太子から見れば父から祖母へ、祖母から叔母へ代わつたのである。首皇太子はすでに十五歳だったが身体が弱かつたのだらう。祖母に次いで叔母がなお暫く政務を見ることになった。娘時代の名は氷高皇女^{ひたか}、母元明に似た性格のおだやかな方で独身。時に三十六歳。奈良朝二代目の女帝である。

元正女帝は即位から三年目の靈龜三年十一月（仲麻呂等が唐へ出発してから八ヵ月後）元号を養老と改めた。養老という言葉の出典は孟子尽心編の「伯夷^レ辟^レ紂、居^ニ北海之濱^一、聞^ニ文王作興^一曰、盍^レ歸乎来、吾聞西伯善養^レ老者。」だというが、別に、人の心を打つような日本の伝説も改元の理由として残っている。

その頃美濃国養老山系の山懷ろに源丞内という名の孝行者の樵夫が居つて酒好きな老父のために仕事からの帰りに毎日酒を買つて来ては飲ましてやつていた。ある日丞内が山へ行つて一日の仕事を終え帰途に就くと谷川の方からぶんと酒の匂いが漂つて来る。不思議に思つて谷へ降りて見ると大きな滝があり、酒の匂いはそこから出ていることがわかつた。丞内が滝の水を酌んで口に含んで見ると、あな不思議や液体は酒そのものではないか。それから源丞内は毎日山仕事の帰りにその水を瓢箪に汲み入れては家に持つて帰り父の口を慰めていたが何時しか都に聞こえ元正帝の耳にまで達した。帝は宣われた。

「これは瑞兆じゃ。樵夫の孝心に感じた神が水を酒に換え給うたのであらう。朕も一度現地^{みゆき}に幸してその滝を見せて貰おう。」

元正女帝は間もなく美濃に幸して孝行息子と老父に沢山の贈物を授け、滝を養老の滝と名づけ、新たに養老郡という名の郡を設置した。更に都に遷ると元号も「養老」と改めた——というのである。中国にもあちこちに醴泉湧出の物語があるのであるいは出所は孟子でも孝子でもなく、中国渡来譚の日本版焼き直しかも知れず、一書などにはこれも不比等が演出したお芝居に違いないと評する者もある。藤原不比等とい

う男はよく才智に長けた徳の少ない人物のように言われる。しかしこの場合はそう思いたくない。この物語には孝子と共に元正女帝の人柄と慈愛深い政治姿勢もよく現されており、不比等演出の芝居であろうが無かるうがはるばる美濃へ行幸され田舎の孝子を褒められたのは元正女帝なのだ。昔の時代の小学校教科書にはこの物語が載っており、唱歌でも教わった。美濃の国、養老の滝、元正天皇、これらの言葉は皆その時憶えたもので、今も「老いはしつれど何よりも酒を好める父のあり」というその唱歌を口ずさむと、深山の若葉の中にたぎちつ落ちる滝の姿と、滝水を掬う孝子と、女帝の行幸の行列とやさしいお顔、この物語と歌を教えてくれた担任の女の先生の顔が浮かんて来るのだ。

奈良朝七代七十余年の王都の舞台は完全に出来上がった。遷都以来七年、宮殿や殿閣もほぼ完成し、政府の官衙は重々しく居並び道路は四通八達の交通網を整えた。北、蓋山（三笠山）の麓には常陸の鹿島神宮の祭神武甕槌命外三神をお招きして藤原氏の祖神として祭った春日神社も朱塗りの社殿が若葉に映え、興福寺はその南外京の東端に、大安寺は東市の東北側に、薬師寺は右京五条二坊に、元興寺は外京興福寺の南に所を得てそれぞれ輪奐の美を誇っている。特に左京の東北隅外京界隈には貴族級の邸宅が多く、それらの邸の殆どに林泉園池がしつらえてあって池のほとりには亭などが垣間見える。官人や庶民の家もこの頃は手入れ修理がかなり行き届いて来た。高官の庭園にも庶民の狭い庭先にも四季の巡りと共に日本在来種や大陸渡来の草木の花々が咲き小鳥が囀り啼いて都民の眼と耳と心を慰めている。まことに小野老が大宰府在任中奈良の都を偲んで作った歌

青丹よし奈良の都は咲く花の 薫ふが如く今盛りなり

あるいは平安中期の歌人伊勢大輔が奈良の都を追懐し平安京と比えて作った歌

古への奈良の都の八重桜 今日九重に匂ひぬるかな

更に江戸時代前期芭蕉が詠じた

奈良七重 七堂伽藍 八重桜

等はいずれも繁栄期最盛期の奈良京を偲び思い懐しんで作った歌や俳句であるが、丁度今奈良はその繁栄期に差しかかっているのである。

そして靈龜三年春三月十五日のこの夕べ、八重桜匂う奈良の都は更に大きな発展をするために行う大行事を明日に控えて瑞気の中になお昏れなずんでいる。大行事とは何だろうか。それは遣唐使の出発式だ。大宝元年以後長い間途絶えていた遣唐使団が海の彼方唐国へ派遣されるのだ。そしてその中には養老の孝子に劣らない孝子が一人加わっている。

月下送別

夕べの色が刻一刻と濃くなつて来た。宮城では漏刻の目盛を見て時刻を知らせる役目の漏刻博士が守辰丁という当番役に暮鼓を打つ時間だと告げる。漏刻というのは中務省陰陽寮に設置されている水時計で、漏壺という容器に入れた水が底の穴から漏り減つて行くのを漏箭という目盛に表われ行く目印で測り時刻の経過を知る装置である。我が国には天智天皇の十年（六七一）唐から渡来し始めて使われたというが、それからでもすでに五十年近く使用されているのだ。一夜は五更、一更毎に鼓を打つて時を報せる。暮鼓が鳴り渡ると都門はすべて閉される。朝の出勤時間を知らせるのが曉鼓（開門鼓）だ。閉門や出勤の時間は季節によつて異なるがそれは時刻を昼夜を通した絶対時間の十二分割でなく一日の活動の時間の長さを昼の時間の長さで決めるからだ。守辰丁は指示によつて決められた数の閉門鼓を鳴らす。まだ雑音の少ない静かな都だから、ほぼ四キロ四方の隅々まで太鼓の音は明瞭に伝わって行く。寺々の夕べの鐘の音も暮鼓の音の後を追うように巷へ流れて行く。太鼓の音が鳴り終えると羅城門朱雀門はじめ宮城の十二門、並びに都城の諸門は左右京職の兵士によつてすべて堅く閉められてしまふ。東西市場の門も閉される。都に夕暮れが訪れる。都の一日の仕事と営みが了つた。街路や建物を夕べの帳が薄昏く包み始める。

この頃の八省文武百官の勤務は原則として午までである。たまたま何か特別な仕事が出来て夕方まで官中や諸官衙に残っていた大官人や官人達も宿直者等を除き今は大抵家路に就き、暫く大路を馬や徒歩で過ぎて行く馬蹄や鞏音や話声が聞こえていたがそれも殆ど聞こえなくなつた。昼の間はかなり頻繁に都大路